

## 文学からの流離

保坂達雄

1

昼まえ、テレビのスイッチを入れてみた。ちょうど天気予報が流れていて、その背景に沖繩・石垣島の風景が写されていた。なつかしい景色であった。川平湾を望み、黒真珠の養殖の場面をクロージング・アップし、畑を鋤く黒い牛の長い角がのどかな自然を描き、漆喰で塗りがためた赤瓦の屋根が南国への旅情をかきたてていた。

夕刻、テレビはまた石垣島の眼の前の竹富島の種子取祭の模様を写していた。今年秋に行なわれた祭のフィルムであった。観光に島の多くを奪われ、かつての田畑もギンネムの林と化して、農業に携わる者のなくなった島に、今若者たちがUターンしつつある様子を織りまぜての放送であった。

昨日のことである。こんな具合に、沖繩に興味をもつことが多く続いているのである。それというのも、四年前の柳田国男への関心にはじまる。もちろんそれ以前にも注意はしていたが——たとえば昭和49年谷川健一の『沖繩——辺境の時間と空間』（昭45 三一書房）をはじめ読んで読んだ時の感動を今に忘れない——。その年、『遠野物語』を詳さに注釈をつけながら読む作業を試みた。民俗学の成果を基本から学び直してみようとしたのである。柳田の関心が遠野

から琉球へ、「北」から「南」へ急旋回したように、おのずから私の興味も「南」の沖繩に転移していった。その翌年は、『海南小記』を一章ごと丁寧な注釈をつけてみた。同時に、南島研究の歴史と現在をも履習してしまおうとの意気込みだった。南島に伝わる神話伝承、伝説、昔話などにはじまり、信仰習俗、年中行事、生活伝承その他、多岐にわたるテーマを学習し終るのに、もう一年を費やした。

いきおいづいた南島への興味は、実地調査を強いることになった。昭和53年9月、石垣島川平のマングナシ採集、昭和54年3月の宮古・多良間島・水納島の信仰習俗調査、7月から8月にかけての八重山諸島アカマター・クロマター採集、川平の結願祭調査を中心にしての宮古・八重山採訪。9月の川平マングナシ再調査、西表島・租納の節祭調査、昭和55年3月の奄美・加計呂麻島採訪、7月同地調査と続けてきたのであった。

2

かくして、古代文学からの流離の旅は果てもなくなってしまうのである。あるとき、古代文学の世界と深く交錯している古代民俗を配慮すべきことを思いたち、奥三河花祭・坂部冬祭、西浦田楽などを見歩いて以来、如上のような民俗の世界への親昵・沈潜に明け暮れする毎日の連続となったわけである。

このような古代文学からの流離あるいは離反は、何をもたらしたのであろうか。文学との離別、たしかに表面的にはそうである。人麻呂歌集研究が中絶し、東歌への親炙も霧消し、氏族伝承論の立場

からの説話研究も座礁したままになってしまったからである。「サホヒメの物語——伝承論のために」(「萌木」第11号)を除いて、何一つ成果を生み出さなかった。けれども、古代文学を古代文学の表層からのみ見ていくことの困難さと限界性にも気づきはじめていた。古代文学を近代の意識と方法とで解析することの矛盾を、どこかに自覚しはじめていたのである。いうまでもなく、このことは私一個の問題である。私の意識と方法とに根ざした疑問であり、惑いである。この疑問と惑い、そこからうち続く低迷から脱出するため、何が必要だったのであるか。それこそ文学からの流離と離反だったように思う。一度、思い切り離れられるところまで離れてみることに、こうして非文学世界への放浪が始まったのである。

3

それから数年を経て、今。文学が何か身近に感じられ、たしかな感受と実感の深さを体験できるような気がしてならないのだ。文学から行けるところまで遠ざかった結果が、逆に文学の輪郭を鮮明にうつし出す。古代文学がせまってくる。そんな気がしてならない。

万一、そんな風だとしたら、古代文学からの流離の道行はあながち無意味ではなかったことになる。遠まわりではあったが、意義深い彷徨であったといえるのである。

今、私が考えていることは、この流離の旅をもっと持続させること、もっと深化させることである。古代民俗の世界——とりわけ南島に残る古代民俗の世界への行脚と彷徨を重ねることである。そうした果てに、古代文学の相貌がくっきりとその輪郭を開示する。古

代文学が身の前にせまり、その現場にひき込まれる。そういう予感がするのだ。その予感に賭けて、今南島彷徨をさらに深めようとしている。